

初回面接において状態不安とその変化に関連する 個人内・対人間要因のパイロット研究

田 澤 安 弘

初回面接において状態不安とその変化に関連する 個人内・対人間要因のパイロット研究

田澤安弘

目次

- I. はじめに
- II. 対象と方法
 1. 倫理的配慮
 2. 対象
 3. 心理尺度
 4. 方法
- III. 結果と考察
 1. ダイナミック・アセスメント
 2. 1回目および2回目の状態不安とその他の変数との関連性
 3. セッション評価と2回目の状態不安および被受容感との関連性
 4. セッション中因子が状態不安の変化量に与える影響
- IV. まとめ
- 文献

【要旨】

本論の目的は、初回面接においてクライアントの状態不安に関連する諸要因について検討することである。そのため、19人のクライアントを対象として、セッション開始時と終了時にダイナミック・アセスメントを行って状態不安の変化を測定し、その2回の測定結果と、クライアントの個人内要因およびセッション中の対人間要因との関連性を調べた。用いられた尺度はSTAI, ASF, SACS, J-SEQで、分析の結果、①セッション冒頭でのクライアントの状態不安は、個人内要因（不安静穏化機能 [$\rho = -.620 \sim -.718$]) と対人間要因（被受容感 [$\rho = -.689$]) の両方に関連していた。②セッション冒頭よりも低下した終了時のクライアントの状態不安は ($z = -2.425, r = -.56$)、個人内要因との関連はなく、対人間要因（被受容感 [$\rho = -.816$], セッションの深さ [$\rho = -.809$], セッションのなめらかさ [$\rho = -.604$]) にのみ関連していた。③セッション中の被受容感が大きいほど状態不安がより低減する可能性が示唆された (odds ratio : 1.57, 95% CI[1.00-2.46])。

I. はじめに

森 (2015) は、ブリーフセラピストの毎回のセッションの最低達成目標は「クライアントが部屋に入ってきたときの表情より、出ていくときの表情がよいこと」であるとしている。不安な気持ちや気分の落ち込みが退室するときに少しでも改善されていることは、そのつどのシングル・セッションにおける即時的な効果として確かに重要なことであるし、少なくとも、セッション内で動揺したクライアントが何の手当も受けずにそのまま退室するようなことは、決してあってはならないで

あろう。では、多義的な表現である「よい表情」を不安・緊張の緩和と規定し直すとして、クライアントが入室したときよりも退出するときの方がよい表情になっているセッションとは、一体どのようなセッションなのであろうか？

本論では、セッションの場における状態不安とその変化に着目し、セッション冒頭でのクライアントの不安・緊張はどのような要因と関連しているのか、冒頭で認められた不安・緊張がセッション終了時に緩和されているとすればその低減はどのような要因と関連しているのか検討を加え、不安・緊張の低減に

キーワード：初回面接, 状態不安, 被受容感, セッションの深さとなめらかさ, アウトカム

対して即効性のあるセッションを実現するための諸条件を明らかにするつもりである。対象とするのは、これまでの研究 (Cooper, M., 2008) からセラピーによる改善の程度が最も大きいと考えられる初期段階のセッション、それもクライアントの反応性や動機づけが高まっていて「最も効果性が高い」(森, 2015) と考えられる初回面接である。

以下は、本論で検証する仮説を問いかたちにしたものである。まず、①クライアントとセラピストが初めて顔を合わせる初回面接の冒頭では、セラピストがどのような人物であるのか、セラピーではどんなことが行われるのか未知ということもあり、程度の違いこそあれクライアントは不安・緊張感を抱いているはずである。この時のクライアントの不安・緊張は、感情の協働調整を含んだセラピストとの濃密な交流が開始される前であることから、性格特性的な不安や感情の自己調整などが相互に作用しあった結果としての、クライアント個人の不安になりやすい傾向やなりにくい傾向と関連しているのではないかと？②一方で、セッション終了時のクライアントの不安・緊張あるいはその低減は、セラピストと一定時間の交流を終えた後であることから、クライアントの個人内的な特性というよりもむしろ関係性に関わるようなクライアントが体験したセッションの質や、交流のプロセスでクライアントが実感したセラピストからの被受容感と関連しているのではないかと？

セッションの質的側面である作業同盟や、セラピストからの被受容感あるいはセラピストの肯定的配慮と、セラピーのアウトカムとの関連性については、これまでに数多くの研究が蓄積されている。しかし、たとえば Barry, A. F., et al. (2017) の64件の調査研究に関するメタ分析に示されているように、セラピストの肯定的配慮には一定程度の効力があることは確かであるものの、効果量の視点から見ると結果はあまり芳しくないとい

言えるであろう (Hedges' $g = .28$ [95% CI = 0.25, 0.31])。また、不安障害に対するセラピーの治療関係について調査した15件の研究を対象とするメタ分析 (Hoang, K. L., et al., 2020) でも、共感とアウトカムとの関連性は認められたものの、やはり肯定的配慮のエビデンスとなる研究がなかったことが報告されている。

セラピーの場面において、肯定的配慮の姿勢がクライアントの変化を促進することは多くのセラピストが体験しているはずであるが、どうしてこのような結果になるのであろうか？まったくもって意外である。おそらく、セラピストからの被受容感ないしセラピストの肯定的配慮とアウトカムの関連性が薄いのは、上記の研究が対象とするアウトカムが継続的なセラピーによる中期的ないし長期的なものであることに起因するのであろう。では、シングル・セッションそれ自体のアウトカムとセッション内部の要因との関連性、つまりセラピストからの被受容感の超短期的な効果についてはどうであろう。これが、今回の調査の背景にある、もうひとつの大きな問題意識である。

II. 対象と方法

1. 倫理的配慮

本研究の対象は、筆者が時間制限短期療法 of 包括的研究を行った際に協力者として応募した方々である。募集は、X 市内にある私設心理相談室のウェブサイト上に研究の内容を掲載して行った。セラピーと研究に関する個人情報保護その他のインフォームド・コンセントは紙面と口頭の両方で行い、署名によって同意を示した方のみセラピーに導入した。なお、セラピーの料金は無料である。

2. 対象

協力者であるクライアントは X 年 Y 月か

ら X+1年 Z 月の18カ月の間に上記の調査研究に応募した19人である。すべて女性で、平均年齢は 36.95 ± 10.22 歳であった。クライアントは何らかの悩みや困難などを抱えた通常の臨床事例であり、STAIによって測定された来談時の特性不安の平均値は 84.05 ± 13.97 パーセンタイル、BDI-IIによる抑うつ平均値は 21.05 ± 9.17 点であった。また、来談するまでの少なくとも半年間は精神科などの通院歴はなく、来談時に他の医療機関や相談機関を利用していない人を受け入れた。

3. 心理尺度

(1) 新版 STAI 状態 - 特性不安検査 (State-Trait Anxiety Inventory-JYZ : STAI) : 肥田野ら (2000) が作成した STAI を用いた。これは「状態不安」および「特性不安」を測定する尺度であり、いずれも1因子、20項目から構成されている。1~4の4件法で回答を求め、数値はすべてパーセンタイルに換算した。

(2) 日本語版セッション評価尺度 (The Japanese Session Evaluation Questionnaire : J-SEQ) : Stiles, W. B., et al. (2002) の Session Evaluation Questionnaire (Form 5) を、桂川ら (2013) が日本語訳して作成した J-SEQ を用いた。これはシングル・セッション内の即時的な効果、つまりセッションのインパクトを測定する尺度で、セッションそのものが評定される「セッション評価」11項目と、セッション終了直後の自分自身の気持ちが評定される「セッション後気分」10項目という、二つの下位尺度から構成されている。さらに「セッション評価」は「深さ (Depth)」と「なめらかさ (Smoothness)」の2因子から、「セッション後気分」は「肯定感 (Positivity)」と「覚醒度 (Arousal)」の2因子から、それぞれ構成されている。1~7の7件法で回答を求め、数値は粗点を用いた。なお、この尺度はクライアントとセラピストの双方が評定可能であるが、今回はクライアントの「セッシ

ョン評価」のみ使用した。

(3) 被受容感尺度 (The Sense of Acceptance Scale : SACS) : 石原 (2013) が作成した SACS を用いた。これは「胸が暖かい感じがする」「大切にされていると感じる」など、他者からの被受容感を感じる程度の強さについて測定する9項目、1因子から構成されている。1~5の5件法で回答を求め、数値は粗点を用いた。また、教示は「以下を読んで、たった今あなたがどう感じているのか、もっともよくあてはまると思う数字ひとつを○で囲んでください」に改めた。

(4) 不安静穏化機能尺度 (Anxiety-Soothing Function scale : ASF) : 田澤・橋本 (2019)、田澤・近田 (2021) が作成した ASF を用いた。これは不安状態からの回復を促進する心理社会的な不安静穏化機能を測定する尺度であり、「セルフトークによる静穏化」、「自動的静穏化」、「心内化された肯定的な声」の3因子、全17項目から構成されている。1~5の5件法で回答を求め、数値は粗点を用いた。

以上の尺度から、STAI と ASF に関しては個人内要因を測定するために、SACS と J-SEQ に関しては対人間要因を測定するために、それぞれ用いた。

4. 方法

この初回面接は、クライアントから情報を収集してセラピーのための見立てに至ることを目的としたインテーク面接ではない。つまり、あらかじめ定められた項目に従ってセラピストが問い、クライアントが答えていくような心理学的診断面接を指向していない。あくまでクライアントは自由に語り、セラピストは初回面接であるにもかかわらず積極的に介入していく「エンゲージメント・モデル (engagement model)」（Chow, D., 2018）を基本としており、その意味で通常のセッションと異なるものではない。ここで言う介入と

は、筆者の場合、セラピーを効果的に展開する中核条件である自己一致、肯定的配慮、共感を基本的態度としながら、賞賛、保証、勇気づけ、助言、明確化、直面化、解釈といった支持的技法(Winston, A., et al., 2004)や、エンパワーメントその他の技法を交えて関与することを意味しており、具体的には個々のクライアントに応じて使い分けられる。したがって、クライアントによって介入法は異なる。また、ブリーフセラピーの初回面接において広く行われているように、最初の介入を行うだけでなく、その効果を評価することも行う (Budman, S. H., et al., 1992)。

以下は初回面接の流れである。クライアントが入室してからセラピーと研究に関わるインフォームド・コンセントおよび必要書類への記入を、次いで1回目の測定を行う。この際は STAI の状態不安と被受容感尺度を実施する。入室からここまでの手続きに要する時間は10～15分程度である。質問紙への回答が終わり次第、クライアントが抱えている困難について傾聴していく。

クライアントの語りとセラピストの介入が終わると、今度は2回目の測定に移行する。この際には STAI の状態不安、被受容感尺度、それからセッション評価尺度を実施する。質問紙への回答が終わり次第、セラピストは1回目と2回目の STAI の状態不安および被受容感尺度を採点して変化をグラフ化し、セッション評価尺度の結果を加味しながらクライアントの気分の変化、セッションの感想、セラピストに対する印象などについて話し合う。この手続きに要する時間は10分程度である。

最後に、セラピーへの導入に向けて具体的な内容について話し合う。もしもクライアントがセラピーを希望すれば、治療契約に関する詳細なインフォームド・コンセントを行う。同意に至れば、次回セッションの予約をしてこの初回面接は終了となる。終了後に、

STAI の特性不安と不安静穏化機能尺度を実施する。

以上が初回面接の流れである。STAI の特性不安、不安静穏化機能尺度、セッション評価尺度に関しては1回の測定であるが、STAI の状態不安と被受容感尺度に関しては、介入の前後に測定して変化をアセスメントする「ダイナミック・アセスメント」(Lidz, C. S., and Elliott, J. G., 2007) の形式で行ったため2回の測定であった。

なお、データの統計解析には EZR(Kanda, Y., 2013) を使用した。

III. 結果と考察

1. ダイナミック・アセスメント

(1) 状態不安の変化

各変数の基本統計量を表1に示した。状態

表1 各変数の基本統計量

| | 平均値±標準偏差 |
|--------------|--------------|
| STAI | |
| 状態不安 (1回目) | 63.84±21.19 |
| 状態不安 (2回目) | 47.16±23.78 |
| 状態不安 (2-1回目) | -16.68±24.43 |
| 特性不安 | 84.05±13.97 |
| SACS | |
| 被受容感 (1回目) | 24.16±6.31 |
| 被受容感 (2回目) | 29.05±7.73 |
| 被受容感 (2-1回目) | 4.89±6.45 |
| J-SEQ | |
| 深さ | 25.79±4.64 |
| なめらかさ | 26.89±4.53 |
| 肯定感 | 23.32±3.76 |
| 覚醒度 | 17.89±4.32 |
| ASF | |
| 総合得点 | 42.89±12.32 |
| セルフトーク | 13.26±5.03 |
| 自動的静穏化 | 14.89±4.50 |
| 心内化された声 | 14.74±7.48 |
| 時間 (分) | 74.67±15.07 |

N=19

不安の1回目の平均値は 63.84 ± 21.19 , 2回目は 47.16 ± 23.78 , 変化量の平均値は -16.68 ± 24.43 であった。これら前後の状態不安についてウィルコクソンの符号付順位検定を行ったところ, 効果量大の有意差が認められた ($z = -2.425, p < .05, r = -.56$)。したがって, 本研究における初回面接にはクライアントの不安-緊張を低減する即時的な効果があったことが確認され, 本論で検討するセッションの前提条件である「クライアントが部屋に入ってきたときの表情より, 出ていくときの表情がよいこと」が全体として満たされていることが示された。

しかし, 今回測定された数値は, 筆者(田澤ら, 2017)が別の目的で以前行った同様の研究(以下, 研究A)の結果とはやや異なるものである。その研究に使用したデータ(N=53)では, 1回目の状態不安の平均値が 73.40 ± 18.09 , 2回目が 50.98 ± 22.74 , 変化量が -22.42 ± 23.64 ($r = -.69$ [effect size])であった。今回の1回目の状態不安は基準値の範囲に収まる63パーセントイルであったのだが, 研究Aでは73パーセントイルと基準値を少し超えていて, この両者の違いについては解釈が必要であるように思われる。

この違いは, おそらく手続き上の違いに由来するのであろう。今回の調査では, セッションの冒頭でインフォームド・コンセントその他に10分程度の時間をかけてから1回目の測定を行った。研究Aでは, クライアントと顔を合わせてから少し会話してダイナミッ

ク・アセスメントの説明を行い, すぐに1回目の測定を行った。インフォームド・コンセントはその後である。つまり, 両者では測定前の交流の時間と内容が異なっており, その違いによってセッション冒頭での不安-緊張状態の程度に差異が生じたのであろう。

(2) 状態不安, 被受容感, 時間の関連性

ダイナミック・アセスメントの形式で2回測定した状態不安と被受容感, 1回目の測定終了直後から2回目の測定開始直前までの時間(秒単位は切り捨て)の関連性を調べるために, スピアマンの順位相関係数を求めた(表2)。

その結果, 状態不安と被受容感の間では, それぞれの1回目に中程度の負の相関が ($\rho = -.689, p < .001$), 2回目に強い負の相関が ($\rho = -.816, p < .001$), 変化量(2回目-1回目)に強い負の相関が ($\rho = -.863, p < .001$), それぞれ認められた。その他, 状態不安の変化量と2回目の被受容感との間に中程度の負の相関が ($\rho = -.563, p < .05$), 被受容感の変化量と2回目の状態不安との間に中程度の負の相関が ($\rho = -.575, p < .01$), それぞれ認められた。これらのことから, いずれの場合でも被受容感が高いほど, あるいはその変化量が大いほど不安-緊張が低くなったり, 状態不安の変化量が肯定的な方向に大きくなったりする傾向が認められ, セッション内における状態不安とその変化は, そのつどの被受容感と関連していることが理解された。

表2 状態不安, 被受容感, 時間の関連性

| | 状態不安1 | 状態不安2 | 状態不安2-1 | 時間(分) |
|---------|---------|---------|---------|-------|
| 被受容感1 | -.689** | | | |
| 被受容感2 | | -.816** | -.563* | .263 |
| 被受容感2-1 | | -.575** | -.863** | .236 |
| 時間(分) | | | -.253 | -.422 |

* は5%水準, ** は1%水準で有意であることを示す。

また、時間と、2回目に測定された状態不安 ($\rho = -.253, n.s.$) および被受容感 ($\rho = .263, n.s.$) との間、同じく状態不安 ($\rho = -.422, n.s.$) および被受容感 ($\rho = .236, n.s.$) の変化量との間には、相関が認められなかった。このことから、セッションにかける時間は、2回目の状態不安と被受容感、それぞれの変化量とは関連しないことが理解された。

被受容感尺度によって測定されるのは、肯定的配慮を受けた者が抱く感覚としての被受容感の程度である。ただし、本論では教示文を「たった今あなたがどう感じているのか」に変更しているため、日常的な生活場面での被受容感ではなく、自分を支えてくれるセラピストの存在を感じ、自分は目の前にいるセラピストから一定の理解やあたたかさ、承認を持って大切に扱われ、支えられているという認識と情緒が、つまり状態的な被受容感が測定されることになる。今回、セラピー場面における今ここでの被受容感が、同じく状態的な不安・緊張感と負の相関関係にあることが分かった。セラピストからの状態的な被受容感が直接的に状態不安に影響を及ぼして、それを緩和する可能性が見えてきたのである。今後は、さらにサンプル数を増やしたうえで、シングル・セッション内におけるアウトカム（不安・緊張の緩和）に対する状態的な被受容感の因果関係を検証するつもりである。

セッションにかかった時間は、被受容感や状態不安とは関連しないことが理解された。しかしながら、状態不安の変化量は、有意な結果にはならなかったものの、時間との間に中程度の負の相関が示されている。もしかすると、サンプル数が増えた場合には、有意な相関が示される可能性があるのかもしれない。今回の結果を踏まえると、確かにセッションの長さは関連性がなく、それが不安・緊張を低減する要因のひとつであると考えこ

とはできない。しかし、クライアントにとって新奇であろう初回面接の場に慣れて、不安・緊張が緩和されるためには、ある程度の時間を要すると考えるのが自然なことであろう。この時間要因の影響を取り除くことで、不安・緊張を低減するシングル・セッションの純粋な効果が取り出せるように思われるのである。この点についても、今後の検討課題としたい。

2. 1回目および2回目の状態不安とその他の変数との関連性

1回目の状態不安とその他の変数との関連性を調べるために、スピアマンの順位相関係数を求めた(表3)。その結果、1回目の状態不安と1回目の被受容感との間に中程度の負の相関が ($\rho = -.689, p < .001$)、ASFの総合得点との間に中程度の負の相関が ($\rho = -.620, p < .01$)、ASFの自動的静穏化との間に強い負の相関が ($\rho = -.718, p < .001$) それぞれ認められたものの、特性不安との間には相関が認められなかった ($\rho = .334, n.s.$)。このことから、1回目の状態不安は、被受容感と、不安を静穏化する心的機能、特に楽観的傾向と関連が強い自動的静穏化が高いほど低くなる傾向が認められ、セッ

表3 1回目・2回目の状態不安とその他の変数との関連性

| | 状態不安1 | 状態不安2 |
|---------|---------|---------|
| (STAI) | | |
| 特性不安 | .334 | -.040 |
| (SACS) | | |
| 被受容感1 | -.689** | — |
| 被受容感2 | — | -.816** |
| (ASF) | | |
| 総合得点 | -.620** | -.296 |
| セルフトーク | -.301 | -.185 |
| 自動的静穏化 | -.718** | -.356 |
| 心内化された声 | -.314 | -.138 |

** は1%水準で有意であることを示す。

セッション冒頭での不安-緊張は対人間における被受容感および個人内における不安静穏化機能と関連していることが理解された。

2回目の状態不安とその他の変数との関連性を調べるために、スピアマンの順位相関係数を求めた(表3)。その結果、2回目の状態不安と2回目の被受容感との間に強い負の相関が認められたものの($\rho = -.816, p < .001$), 特性不安($\rho = -.040, n.s.$), ASFの総合得点($\rho = -.296, n.s.$)と下位尺度($\rho = -.138 \sim -.356, n.s.$)との間には相関が認められなかった。このことから、2回目の状態不安は2回目の被受容感が高いほど低くなる傾向が認められ、セッション終了時の不安-緊張は対人間における被受容感と関連するものの、個人内要因としての特性不安や不安静穏化機能とは関連しないことが理解された。

2回目の状態不安とその他の変数との関連性については、予想通りの結果になったように思われる。それは、セラピストの介入を含む一定時間の交流を終えた後のクライアントの不安-緊張、あるいはその低減は、もはやセッション冒頭での個人内的な特性不安や感情の自己調整機能との関連性が希薄化して、外的な対人間の要因であるセラピストからの被受容感との関連性を強めているはずである、というものであった。

ところが、1回目の状態不安とその他の変数との関連性については、予想通りの結果にはならなかった。予想としては、セッション冒頭でのクライアントの不安は、クライアント個人の不安になりやすい傾向やなりにくい傾向、つまり個人内要因としての特性不安と不安静穏化機能に関連しており、外的な対人間の要因としての被受容感とは関連していないものと考えられた。しかし、不安静穏化機能についてはともかく、予想に反して、状態不安と特性不安との関連性はなく、さらに被受容感との関連性があることが判明したので

ある。

このような結果になったのは、すでに述べたように、インフォームド・コンセント後の測定という条件によるのかもしれない。10分程度ではあるが、インフォームド・コンセントの手続きにおいてクライアントの被受容感に影響を及ぼすような交流が行われており、この段階ですでに不安-緊張が少し低減している可能性が否定できないのである。

研究Aに使用したデータ(N=53)では、特性不安の平均値が 83.42 ± 19.02 パーセントイルであり、今回の調査における 84.05 ± 13.97 パーセントイルとあまり違いはない。特性不安とセッション冒頭での状態不安には、中程度の正の相関が認められた($r = .506, p < .001$)。STAIの標準化資料(肥野田ら, 2000)でも、特性不安と状態不安には中程度の正の相関($r = .633 \sim .694$)が確認されている。今回の調査で両者の間に関連性が認められなかったのは、やはりインフォームド・コンセントの手続きを介した交流によってすでに状態不安が変化したためなのであろう。

3. セッション評価と2回目の状態不安および被受容感との関連性

J-SEQと2回目に測定された諸変数との関連性を調べるために、スピアマンの順位相関係数を求めた(表4)。まず、2回目の状態不安と、セッション評価尺度の深さとの間に強い負の相関が($\rho = -.809, p < .001$), なめらかさとの間に中程度の負の相関が($\rho = -.604, p < .001$), それぞれ認められた。このことから、セッションの質的側面としての深さの程度が高いほど、また、なめらかさの程度が高いほどセッション終了時の状態不安が低い傾向が認められ、セッション終了時の不安-緊張は直前までのセッションの質的側面と関連していることが理解された。

次に、2回目の被受容感と、セッション評

価尺度の深さととの間に強い正の相関が ($\rho = .717, p < .001$), なめらかさととの間に強い正の相関が ($\rho = .716, p < .001$), それぞれ認められた。このことから, セッションの質的側面としての深さの程度が高いほど, また, なめらかさの程度が高いほどセッション終了時の被受容感が高い傾向が認められ, セッション終了時の被受容感直前までのセッションの質的側面と関連していることが理解された。

最後に, セッション評価尺度のなめらかさと, 被受容感尺度の変化量との間に中程度の正の相関が認められた ($\rho = .479, p < .05$)。このことから, セッションの質的側面としてのなめらかさが高いほど被受容感の変化量が大きくなる傾向が認められ, 被受容感の変化の幅は直前までのセッションの質的側面と関連していることが理解された。

J-SEQ によって測定される深さとなめらかさは, 被受容感と同様に, 本論ではセッション中要因であると同時に対人間要因でもある。クライアントにとってセッションがより深く, よりスムーズであった場合に, その状

態不安がより低くなることは, 対人間要因であるセッションの質的側面が不安・緊張の低減というアウトカムと関連していることを意味する。すでに述べた, 2回目に測定された状態不安および被受容感の関連性と合わせて考えると, このアウトカムには, セッションの深さ及びなめらかさと, 被受容感が影響を及ぼすのかもしれない。また, セッションの深さ及びなめらかさには, 2回目の被受容感とその変化量との関連性も認められたので, いずれか一方が他方を媒介して状態不安に影響を及ぼす可能性もあるのかもしれない。いずれにせよ, 次節の結果が示唆を与えてくれるはずである。

4. セッション中因子が状態不安の変化量に与える影響

セッション中因子が状態不安の変化に与える影響を調べるために, 状態不安の肯定的変化あり群となし群に分類された変化量を目的変数, 2回目に測定された被受容感, セッション評価尺度の深さとなめらかさを説明変数として, ステップワイズ法でロジスティック

表4 J-SEQ と2回目に測定された諸変数との関連性

| | 状態不安2 | 状態不安2-1 | 被受容感2 | 被受容感2-1 |
|-------|---------|---------|--------|---------|
| J-SEQ | | | | |
| 深さ | -.809** | -.401 | .717** | .334 |
| なめらかさ | -.604* | -.243 | .716** | .479* |

* は5%水準, ** は1%水準で有意であることを示す。

表5 セッション中因子が状態不安の変化量に与える影響についてのロジスティック回帰分析の結果

| | 相関係数(ρ) | 偏回帰係数 | オッズ比(95%CI) | P値 |
|--------------|----------------|----------------|--------------------|-------|
| 被受容感2 | -.563* | 0.451* | 1.57(1.00-2.46) | 0.049 |
| 深さ | -.401 | — | — | |
| なめらかさ | -.243 | — | — | |
| 基準コード \geq | -16.68 | 肯定的変化なし群(N=9) | 2.11 \pm 17.83 | |
| 比較コード $<$ | -16.68 | 肯定的変化あり群(N=10) | -33.60 \pm 15.49 | |

* は5%水準で有意であることを示す。

回帰分析を行った(表5)。状態不安の肯定的変化あり群となし群に関しては、状態不安変化量の平均値である-16.68パーセントよりも大きな負の変化を示したクライアント、つまり不安-緊張がより大きく減じたクライアントをあり群に、それよりも小さな負の変化およびより大きな正の変化を示したクライアントをなし群に振り分けた(あり群(N=10) < -16.68 ≤ なし群(N=9))。分析の結果、三つの説明変数のうち最終的に被受容感だけが有意な変数として選択された(オッズ比:1.57, 95% CI[1.00-2.46], $p < .05$)。このことから、セッション中の被受容感が状態不安に影響を及ぼして、被受容感が大きいほど状態不安が低減する程度が大きくなる可能性が示唆された。

不安-緊張の低減の幅というシングル・セッション内におけるアウトカムが、セッションの深さやなめらかさではなく、被受容感による影響を受けることが理解された。ただし、肯定的変化あり群となし群を分割する基準の設定に問題があり、この結果は参考程度に止めておくのが無難であろう。ここでは状態不安の変化量の平均値を分割点にしたわけであるが、現状では何点以上低下すれば臨床的に有意な変化であると言えるのか、その基準がないのである。もちろん、このパイロット研究の段階で被受容感が持つ可能性が見えてきたことは一つの収穫ではあるが、今後さらにサンプル数を増やして、方法論的な限界のない調査によって明らかにするつもりである。

IV まとめ

本論はパイロット研究であり、初回面接においてクライアントの状態不安に関連する諸要因について検討することが目的である。そのため、19人のクライアントを対象として、セッション開始時と終了時にダイナミック・アセスメントを行って状態不安の変化を測定

し、その2回の測定結果と、クライアントの個人内要因およびセッション中の対人間要因との関連性について検討した。分析の結果、①セッション冒頭でのクライアントの状態不安は、個人内要因(不安静穏化機能)と対人間要因(被受容感)の両方に関連していた。②セッション終了時のクライアントの状態不安は、個人内要因との関連はなく、対人間要因(被受容感、セッションの深さ、セッションのなめらかさ)にのみ関連していた。③セッション中の被受容感が大きいほどクライアントの状態不安がセッション内でより低減する可能性が示唆された。このパイロット研究の結果を受けて、今後さらに初回面接のセラピーとしてのアウトカムについて検討を加えていくつもりである。

【文献】

- Budman, S. H., Hoyt, M. F., and Friedman, S. (Eds.) (1992). *The First Session in Brief Therapy*. Guilford Press.
- Chow, D. (2018) *The First Kiss : Undoing the Intake Model and Ignifying First Sessions in Psychotherapy*. Correlate Press.
- Cooper, M. (2008). *Essential Research Findings in Counselling and Psychotherapy : The Facts Are Friendly*. Sage. (清水幹夫・末武康弘監訳 (2012). *エビデンスにもとづくカウンセリング効果の研究—クライアントにとって何が最も役に立つのか*. 岩崎学術出版社.)
- 肥野田直・福島真知子・岩脇三良ほか (2000). *新版 STAI マニュアル*. 実務教育出版.
- 石原由美 (2013). 思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連. *九州大学心理学研究*, 14, 117-124.
- Kanda, Y. (2013). Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics. *Bone Marrow Transplantation*, 48, 452-458.
- 桂川泰典・国里愛彦・菅野純・佐々木和義 (2013). 日本語版セッション評価尺度 (The Japanese Session Evaluation Questionnaire: J-SEQ) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 22 (1), 73-76.

- Lidz, C. S. , and Elliott, J. G. (2007).
Dynamic Assessment : Prevailing Models and
Applications. JAI Press.
- Luong, H. K. , Drummond, S. P. A. ,
and Norton, P. J. (2020). Elements of the
therapeutic relationship in CBT for anxiety
disorders : A systematic review. Journal of
Anxiety Disorders, PMID : 33035773 DOI :
10.1016/j.janxdis.2020.102322
- 森俊夫 (2015). ブリーフセラピーの極意. ほん
の森出版.
- Stiles, W. B. , Gordon, L. E. , and Lani,
J. A. (2002). Session evaluation and the
Session Evaluation Questionnaire. In
G. S. Tryon(Eds.), Counseling Based on
Process Research : Applying What We
Know(pp. 325-343). Allyn & Bacon.
- 田澤安弘・本田泉 (2017). 初回面接前後の状態
不安の変化と多元的ブリーフセラピーの効果と
の関連性—インテーク面接へのダイナミック・
アセスメントの導入, 北星論集, 54, 73-77.
- 田澤安弘・橋本忠行 (2019). 不安静穏化機能尺
度の開発—因子構造, 信頼性, 妥当性の検討.
人間性心理学研究, 37 (1), 57-68.
- 田澤安弘・近田佳江 (2021). 不安静穏化機能尺
度の妥当性の再検討. 北星論集, 58, 33-42.
- Winston, A. , Rosenthal, R. N. , and Pinsky,
H. (2004). Introduction to Supportive
Psychotherapy. American Psychiatric
Publishing, Inc. . (山藤奈穂子・佐々木千恵訳
(2009). 支持的精神療法入門. 星和書店.)